

アミターバ

無量光明

それは五月の半ばに始まった。

男の人が十人以上並んでいて、みな私に背を向けて立っていた。似たような背広を着ていたと思う。そしてそのうちの一人の右腕の袖を、なぜか私が引つ張っている。誰だったのか、憶いだせなかった。なぜ引つ張っているのかも判らなかった。ただ、気がつくとはまるで自然に背広の袖を引つ張っており、自分のほうにぐいと、軽く引いたつもりだったが、その人は何の抵抗もなく、体を伸ばしたまま大きな音をたてて仰向けに床に倒れた。

私は仰天してその場から逃げだした。そこがどこなのかも判らなかったし、憶いだすと大きな音など聞いていないような気もした。が、とにかく私は走って逃げた。少なくとも私はそう思っていた。そしてようやく逃げおおせたと思い、遠くに見える人影が近づいて

くると、まだ誰なのか判らないままに安心して呟いた。

「やっぱし、救急車呼んであげるべきやったんやろかなあ」

その時はもう、倒れた人を気遣う余裕が芽生えていた。人影は、急にそんなこと言われ
ても、という顔で戸惑うようだったが、すぐに「母さん大丈夫よ」「母さん安心して、こ
こは病院なんだから」と言つて私の額に手を当てた。

鼻に緑色の酸素吸入ノズルが差し込まれているのが見えた。

しばらくすると「今日は、いかがですか？」と、婿殿が陽気な声で訊いた。私は、ああ
夢かと思い、ようやく完全に自分に戻つて言つた。

「はあ、青ひげになつてもうて、だんだんエラなりますわ」

婿殿は立ったまま、丸剃りの頭と額に窓からの光を受けて笑つた。しかし娘の小夜子は
一瞬笑いはしたもののすぐに近づけた顔の眉根を寄せて訊いた。

「だんだんエラなんの？」

小夜子は大阪弁の「エラなる」と受けとめたらしかつた。私は可笑しくてちよつと頬笑ん
だ。しかしすぐに、その意味でもだんだんエラくなるのか、と思ひ直し、憂鬱になつた。

「意識はしっかりしている」

微熱は続いていたけれど、その思いが救いのように降りてきた。たった今見た不思議な光景も、そのときはさしたる意味のない夢なのだと思います。

自分の病気が肝臓のガンだということは、聞いていた。

三月のお彼岸入りの日に入院し、数日の検査のあとで手術の必要を告げられたとき、米田^だ先生は精一杯深刻そうな顔つきで言った。

「お母さん、やっかいな場所のガンです。胆汁つてのが肝臓で作られるんですけど、肝臓の内部の胆管の周囲にできちゃって、胆管が詰まってきます。手術しないと胆汁がどんどん濃くなって、それが頭にまわると、ヤバイ。手術しましょう。手術といつても管^{くだ}を差し込むだけですからそう難しいものじゃありません」

婿殿や小夜子にはもつと詳しく話したのだろうが、私にはじつに簡潔に、蛍光板に写真を透かせながらそう話してくれただけだ。婿殿の友人でもある米田先生の、こういう迷いを起こさせない言い方が私は好きだ。すぐに「先生にお任せします」と答えたものだった。

後ろに立っていた小夜子と婿殿も、安心したように頷^{うなず}いていた。

そのときはまだ、ガンと言われても死病とは思えなかった。毎日視ていた「みのもんだ」の番組のせいか、治る手立てはいくらでもあるような気がした。いや、ただ漠然と、自分は長生きするという思い込みがあったせいかもしれない。嬭殿が「お母さんには強靱なるさがあるね」と小夜子に言うのを立ち聞きしたことがあったけれど、要はそういうことだったのかもしれない。

やや深刻に現実を感じたのは、手術後十日ほどもしてからだろうか？ 夕方いつものように近所のショッピング・モールでお弁当を買ってきてくれた嬭殿が、何を言ったのだったか、私は聞き咎めて尋ねた。

「え、この袋、とれへんですか？ ……ずっと？」

食事の準備にベッドの上半分を上げるため、小夜子は足許でレバーを廻していた。次第に起きあがってくる脇腹から二本、胆汁を導く管がでて、その先に暗緑色の液体を滲えた袋がそれぞれ付いていた。私は体を起こすのと一緒にその袋を抱え上げて訊いた。

暗くなった病室の窓を背にして立つ嬭殿は、蛍光灯の下ですこし蒼ざめてみえた。しかしじっと私を見つめ、絞りだすように「ええ」と答えるのを見て、私は逆に慰めなくなつた。

「まあこんな袋がついてれば、慈雲さんが托鉢行かるときはお手伝いできるかもしれませんけどなあ」

いつもみたいに婿殿が声をだして笑わないので、私はすこし深刻な気分になった。しかし作務着の着ざらしの藍の風合いを眺めていると、今度はそれに慰められる気がした。そうだ、慈雲さんは和尚さんやし、これから先のことはあんじよう知ってはるやろ……。

四年前、娘が嫁いだ街に越してきたのは随分迷った挙げ句だった。何事も起こらなければ、住み慣れた大阪を離れることなど考えられなかった。嫁いだ先がお寺でもあり、いい福祉住宅があるよ、と言って小夜子がパンフレットなど送ってきて、初めは引越しなど考えられなかった。迷惑はかけられないと思っていたし、だいいち大阪に六十年も住んでいれば友達だって大勢いる。父さんだって連合区長を何年しているだろう？ 何年も苦勞して寄付を集め、作った会館も順調に使われている。慈雲さんが大阪に来るときまっつ会館での葬儀件数を自慢するから、「お父さんの生き甲斐ですね、会館は」なんて冷やかされもした。当時は障害者の作業所の所長でもあったため、午前中は出勤だっっていたのだ。

何事もなければ父さんだつて大阪で死に、おっきなお葬式があつた。会館で行われたことだろう。しかし息子の富雄の家具屋が大震災の影響もあつて破産し、その工場用地の所有者だつた父さんも、世間様に申し訳がたないと破産処分を受けることにした。会社をひとつ閉めるということは取引先や職人さん、更にはその家族など、目に見えない人々にまで御迷惑が及ぶ。そう考へて父さんは、私たちの資産は自宅も含め、すべて管財人の弁護士さんにお渡ししたのだ。

若い頃は父さんも友人の保証人として矢面に立ち、債権者の説得にあつたこともあつたけれど、私より九つ上だからそのとき八十四歳。否いなやはなかつた。翌年には小夜子の勧めに従い、またそれを許してくれた慈雲さんやご両親に感謝しつつこの病院の隣町、つまり小夜子の住む町に越してきたのだつた。

父さんは結局三年足らず、この東北の町に住んだだけで逝いつてしまつた。長年米屋で鍛えた頑健な体だつたけれど、膝ひざや足腰が痛むようになり、最後は肺炎だつた。数えで云いうと八十九歳。しかし一徹な米屋だつたから満みちの八十八のほうが相応ふさわしいと、慈雲さんのお父さんは戒名に「米壽べいじゆ」と入れてくれた。

そういえば父さんが亡なくなつたのもこの病室だつた。手術後運ばれたこの部屋で目覚め

たとき、私は次第にはつきり見えてくる天井を見上げながらそう思った。蝶々ちようちようの形の染しみに見覚えがあったのだ。しかし自分の死を考えたわけじゃない。米田先生が「ものすごくうまくいきましたよ」と言ってくれたし、慈雲さんも小夜子もなんだか涙ぐんで喜んでいのように見えた。それになにより、まだ満では八十まで三カ月以上あるのだ。なんとなく、としか言えないが、私は九十歳以上までは生きられるような気がしていた。……亡くなつた母は最後には盲目だったが、九十四歳まで元気だった。

四月の半ばだったと思う。ステロイドとかいうものを点滴に入れたらしく、私はとても元気になった。鳩尾みぞおちちかくにあいた二つの穴の消毒は辛つらかったけれど、袋を抱えて生きていくのも仕方ないか、という気分になっていた。小夜子が友達に頼み、袋を二つ収められる服を作ってくれたのだ。ピンクとクリーム色の、二着の同じデザインの服で、どちらも二重のガーゼでできていたからベッドでも着られるし外にも出られる。

夕方やってきた慈雲さんに思わず呟いた。

「入院してから、こんな楽なことおませんわ。退院したら、この病院の病人運ぶ特別なシーツ作らなあきませんねん」

「なんですか？ それ」

「いやね、手術室に運んだり、ベッドからベッドに移動させるときな、このシーツの両側持って運びますやろ。あれ、苦しいんですわ。なんやこう、産道とおるみたいな苦しきですんや」

「さんどう？」

「生まれてきたとき、通りましたやろ？」

「え？ お母さん、覚えてるんですか？」

「覚えてしませんがな。喩えたとです、喩え」

「今日はお母さん、随分元気ですね」

「そうですねよ、私、ここで一服してるだけですねん」

「一服ですか？」

「そう、蛙かえるは跳んでも一服が長い」

慈雲さんが声をだして笑い、小夜子がその大声を窺たじなめた。

そのとき私は本当に退院する気だったし、ガンだということも忘れていたかもしれない。そんな莫迦ばかな、と言われるかもしれないが、私の場合はそんな時間が確かにあった。

入院以来、ずっと泊まり込んでいる小夜子のお陰もあるだろう。忙しいのに毎日通ってきてくれる慈雲さんと話すことでも明るくなれた。しかしそれよりなにより、私が死ぬ、私のこの意識がなくなる、という事態が想像できなかつた。

胆道を遡さかのぼって管を通す検査は死ぬほど苦しかった。手術後の痛みも哲さとしや小夜子を産むとき以上だった。しかし過ぎてしまった痛みは過ぎてしまった痛みでしかない。そんなこと気にしていたら今頃こうして東北の町に寝てはいられないはずだ。

そんな考え方とどう関係するのか自分でも判らないのだが、五月の半ばにあの光景を見たあと、私はなぜかあれは夢ではないと思うようになっていた。

あんなふうには倒れるのは晩年の父さんだ。あれはいわば、「迎えにくる」という事態と逆の言伝ことづつてなのではないか。「まだ早いよ」ということを、口べたな父さんはあんなふうに表示したのではないか……。そう思うようになった。

似たような服装の人々は父さんと一緒に区の役員をやっていた皆さんで、父さんが協力を仰いだのかもしれないと思った。父さんより若いのに心筋梗塞こうそくで亡くなった山田さん、交通事故で亡くなった宮本さん、それに肺ガンで亡くなった大井さん……。そうやって憶おもいだすどの人もあの列に並んでいて、私の驚きようを見て笑っていたように思い返された。

あのときは慈雲さんが陽気な顔でいてくれたから、自分でも大袈裟おおげさには考えなかった。しかしあとで小夜子が言うには、短かったけれど仮死状態だったらしい。小夜子は私の頬を何度か叩たたいたと、あとで詫わびるというより自慢げに言った。よく覚えてはいないが米田先生も看護婦さんもその少ししまえまで居て、カンフルを注入して眼にライトを当てていたと云うのだ。

私はそれを聞いて、死を怖おそれるどころか全く別な気持ちになった。やはり死ぬ気がしないのも確かだが、あれが一時的な死だったとするなら、もしかすると死後もなんらかの意識は続くのではないだろうか？ 自信はなかったけれど、あのときの慈雲さんの落ち着きようから考えても、なにかありそうな気がした。

自分に特別な信仰心があるとは思わない。ただ神さまや仏さまを粗末にしちゃいけないと、小さい頃からそう思ってきただけだ。

相変わらずステロイドのお陰で気持ちよく、ガンがどんどん増殖して死ぬなんて信じられなかったが、この分なら死というのも恐ろしいものではないんじゃないか？ 私は次第にそう思いはじめていた。

苦しみがやってきたのは五月の二十日が過ぎてからだだった。微熱が下がらず、腹部の重苦しさは鉛みたいに全身を覆おおつていった。米田先生が「特別な抗生物質を入れます」と枕元まくらもとに立って言うのをただ荒い呼吸で聞きながら、先生がいなくなると小夜子と慈雲さんに言った。

「こういうオタメつてあるんかいなあ」

慈雲さんには意味が通じなかつたらしく、小夜子が解説する。

「オタメつて、結納とかにお祝おいいたでくでしょ。そのお返しのこと。だから……」

「ああ、これまで生きてきたお返し、かな？」

意味が通じたようなので私はあらためて二人を視た。しばらく二人は黙つたまま見合つていたが、やがて慈雲さんが唇をきつく結んでから話しだした。

「お母さん、阪神大震災はんしんで亡くなった人が大勢いたじゃないですか？ あのと、亡くなった人はなにか悪いことした人だと思いませんか？」

私がぼんやり黙っていると、慈雲さんはベッドの横のstuhlすわを引き寄せて坐り、丸剃りまるでの頭を私に近づけてきた。小夜子はまた鳩尾あたりに右手を伸ばしてきた。慈雲さんの頭

の後ろに水戸黄門のラストシーンが流れていたが、私は熱心に問いかける慈雲さんに焦点をあわせた。小夜子の掌てのひらと慈雲さんの両方からなにか温かいものが流れてくるようで、私の呼吸はようやく鎮しずまってきた。

「一所懸命生きてた人も、大震災で死んでますよ。いいかげんに人を騙だましながら生きた人も、同じように死んでませんか？」

「ええ」私はようやくそれだけ答えた。

「だから、天地に仁なしってという言葉があるんですけど、人間の物差しで見るとたぶん間尺に合わないんじゃないですかねえ」

しばらく私はぼんやり水戸黄門の画像に眼を移した。すると印籠いんろうを振りかざした格さんの横で、黄門さんが笑っていた。イヤホーンは外していたからむろん声は聞こえなかったが、しかし私にはその声が聞こえるような気がした。励まされるように私は言った。

「せやけどな、私は通天閣のネキで暮らしてましたやろ」

「ああ……、至誠通天、ですか」

「はい。神さんやら仏さんやらが、見てくれてるんとちやいますのんか？」

「……ええ、見てるかもしれませんが。誠を尽くせば天に通じるってことは、あるかもしれ

ません」

「なんや。……かもしれん、ですか？ しつかりしてや」

「……すみません」

慈雲さんはいつになく真面目まじめに話そうとしていた。眉間みけんに皺しわを刻み、言葉を選んで言うようになったが、その背後では悪代官が地面にひれ伏して許しを乞こうている。すると黄門さんは誇らしげにその罪状を述べたてるのだった。私の視線に気づいた慈雲さんは急にテレビ画面を振り返り、思いついたように言った。

「こんなふうには、我々にはつきり判わかる形では、ないと思うんですよ。だけど……」

「はつきりしてたらよろしいなあ」

「ええ。……だけど、やっぱり、あると思いますよ」

「……何が？」

「お母さんに相応しいオタメです」

「……ほんまに、そう思われますか？」

「……ええ」

慈雲さんは点滴の透明な液体を一瞬見上げたが、すぐに私に向き直るとそう答えて頬笑ほほえ

んだ。それまで眼をとじ、氣を送ることに集中していた小夜子も急に眼をあけて真似るように笑った。しかしそれは笑いにならなかった。眼をテレビに逸らすと、黄門さんが一瞬間魔大王に見えた。

私にとって慈雲さんは、こう言っでは申し訳ないけれど、似た者どうしだと思ってきた。

小夜子との結婚式や披露宴ではあまりにたくさんのお尚さんと圧倒され、僧侶としての慈雲さんしか見えなかった。しかし十年ちかく経つてくると、陽気なお調子者としての似た面が見えてきて、一緒に飲むのが楽しみだった。話していると自分の在り方が肯定されているようで、気持ちが安らいだ。「強靱な明るさ」というのも慈雲さん自身のことやろ、と思っていた。入院したからと云ってその関係が変わるわけではないのだが、私はこのところ、どこかで僧侶としての慈雲さんを求めているような気もした。そしてその無言の要求が、ほんの少し慈雲さんに無理をさせていると思えるのだった。

今日はお通夜なので、と前置きし、しばらく小夜子に代わって掌を当てていた慈雲さんが帰り、また小夜子が夕食の買い物に出て行くと、私は夢を見たようだった。

桜が満開に咲いていた。

ついこのあいだ、萩本先生が車椅子を押してきていきなり「お花見しませんか？」と誘

つてくれた。私はありがたく乗せていただき、小夜子や看護婦さんと並んで病院の玄関横のソメイヨシノを見た。どうやらそのときの桜と思えるのだが、夢の中には私一人しかいなかった。しかも車椅子ではなく、昔の米屋の長い廊下に置いてあつた籐椅子とうに私は坐つていた。

あの日私は、「来年の桜は、見れますやろかなあ」と殊勝なことを言いつつも、じつはそんなに弱気ではなかつた。しかし夢に現れた桜の前に坐つた私は、啜り泣すすいていた。

桜の花弁は開ききつて光を受け、まるで光の波にそよぐように幽かすかに震えている。風はなかつた。私はなぜ泣いているのか解わからないまま、朦朧もうろうとした様子で桜を眺めていたのだと思う。しばらくするとそこは米屋だつた家の庭になつており、誰もいない芝生の上に光だけが燦々さんさんと射さしていた。

たぶん誰かを捜そうとして、私は涙で揺れる両目を手の甲で擦こすつた。しかし誰も見えず、かわりに桜の花弁がさつきより増殖したように見えた。また眼を擦ると今度はそのせいみたいになんか浮あふき立ち騒さわぎ、一斉に宙に舞いはじめた。すこし経つて風が吹いてきたのだと判つたが、どんどん溢あふれてくる涙はまるで散りゆく花弁の化身であるように、止やまなかつた。

目覚めても悲しい気持ちは特になかった。ただ涙だけは本物だったらしく、夢の中そっくりに頬まで溢れ、流れていた。背中の鈍い痛み^にに混じってチクチクとタワシでも当てられたような痛みが背骨の周辺にあった。

その時は気になっていた哲の記憶だと判らず、私は気持ちに関係なく体が泣くということがあるのだと思った。

小夜子が戻ってきてからもチクチクという痛みは治まらず、辛うじて泣き顔は見られなかったものの私はそのことを小夜子に訴えた。すると小夜子は当直だった萩本先生を呼んできたため、消灯後だったのに先生は肝臓に入れてある管を洗おうと言った。米田先生と違ってソフトな話し方をする先生だけれど、むしろ抗い^{あらが}ようはなかった。

クレゾールの臭い^{にお}を感じて首を廻すと、急に蛍光灯を点けられた中空に、たしかにクレゾールと同じ白濁した水面が揺れているのが見えた。

「先生、そないなもので肝臓^んなか、洗うんですか？」

痛みの勢いで失礼な言い方になったが、先生が「ええ、大丈夫ですよ。少し痛いかもしれませんが」と優しく答えたことは覚えていてる。